様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４９８

研究課題名（和文）広東語の文末助詞の文法化経路と意味変化メカニズム－名詞化標識や間投詞からの文法化

研究課題名（英文）Grammaticalization paths and the mechanism of semantic change in Cantonese sentence-final particles: The case of grammaticalization from the nominalizer and from interjections

研究代表者
飯田　真紀（Iida, Maki）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：５０４０１４２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は名詞化標識や間投詞に由来する広東語の文末助詞を取り上げ、その文法化経路やその後の意味変化を通言語的視点を交え考察した。名詞化標識“口既(ge3)”(日本語で「の」に相当)由来の文末助詞にはge3、ge2、gE2が挙げられる。本研究ではこのうちまずge2を取り上げ、従来の見解と異なる文法化経路を提示したほか、ge2における対事的な＜反予期＞用法から対人的な＜反発＞用法への意味変化を跡付けた。また、文末助詞のge3に由来するgE2については、対人的＜異論＞用法からテクスト接続的＜留保＞用法への意味変化を指摘した。一方、間投詞由来の文末助詞には、le1、le5などが挙げられた。

研究成果の概要（英文）：Drawing on cross-linguistic-findings, this study investigated the grammaticalization paths and semantic changes in Cantonese sentence-final particles derived from the nominalizer and from interjections. Cantonese has three particles related to the nominalizer "ge3" (corresponding to "no" in Japanese), namely ge3, ge2 and gE2. First, we discussed ge2 and proposed a new theory on its grammaticalization path. We also showed that ge2 had further undergone a semantic change from the event-oriented 'counter-expectation' use to the interpersonally-oriented 'backlash' use. Then, we discussed gE2, which derives from the sentence-final particle ge3, and identified a semantic change from the original interpersonally-oriented 'objection' use to the textually-oriented 'reservation' use. Concerning sentence-final particles possibly developed from interjections, le1 and le5 were suggested for future investigation.

研究分野：言語学　中国語学

キーワード：広東語　文法化　意味変化　文末助詞/終助詞　名詞化　間投詞　語用論

１．研究開始当初の背景

文末助詞(sentence-final particle)は、発話末助詞(utterance-final particle)や終助詞、語気助詞とも呼ばれるが、日本語や中国語北京官話など、東アジア・東南アジア言語によく見られるカテゴリーで、文内容(命題)をめぐる発話場への提出の仕方、聞き手への伝達上の配慮や態度の表し分けの機能を担う。広東語は、中国語諸方言の中でも、文末助詞がとりわけ発達していることで知られ、個々の文末助詞の分析から、カテゴリー全体の体系を論じたものまで研究の蓄積も豊富であるが、ほとんどが共時的分析である。

近年、言語学においては、文法構造の今ある姿(共時的状態)を理解するためには通時的視点が必要であるとの認識が高まり、文法構造がどのように形作られてくるかを考察する文法化の研究が盛んである。広東語の文末助詞についても、どこからどのようにして形成されてきたのかを論じることが興味深い課題となり得るが、これまで通時的・動的視点を交えた研究は非常に少ない。

確かに、文末助詞は意味自体が捉えにくい語類である。しかし、いくつかの文末助詞については、共時的な言語事実を精査することによって文法化経路や意味変化のメカニズムを跡付けることが可能であると思われる。また、こうした方向にこそ、言語間対照や通言語的な一般化・理論化を行う可能性が開けていると見られる。

以上の経緯から、共時的言語事実を通時的･動的視点から捉え直す試みの１つとして、広東語のいくつかの文末助詞について、通言語的な知見を参考にしつつ、その文法化経路と意味変化のメカニズムを考察するという着想を得た。

２．研究の目的

本研究は広東語という個別言語の文末助詞をめぐる文法化や意味変化の考察を行うが、最終的には通言語的な一般化・理論化につなげる狙いを持つ。そのためには研究対象としては言語間対照や通言語的な考察に資する可能性のある文法化現象がふさわしい。

そこで、広東語という個別言語固有の現象と思われる、実質的・語彙的意味を持つ語から文末助詞への文法化ではなく、より一般性の高い、既に機能語であり抽象的・文法的な意味しか持たない語から文末助詞への文法化(ないしは機能拡張)を中心に扱う。具体的には、まず、名詞化標識“嘅”(ge3)(連体修飾語標識でもある)から文末助詞への文法化及びその後の意味変化を考察する。これは名詞化標識から文末助詞へという変化が、系統・類型が異なる日本語においても名詞化を担う「の」から「の、のだ」という(準)文末助詞が発展してきていることから窺われるように、通言語的に一般性の高い文法化と見られるからである。そのほかに、間投詞(感動詞)から文末助詞への文法化が考察の候補として挙げられる。

そこで、本研究ではこれらの語に由来する文末助詞について、具体的にどういう文脈でどういうメカニズムで文法化が起こったのか、由来となる語の意味は文末助詞としての意味にどう影響しているのかといったことを検討する。また、文末助詞として複数の意味を発達させているものについては、意味変化の詳細を跡付け、通言語的な意味変化メカニズムに照らしてどういう特徴が見られるかを探ることを目指した。

３．研究の方法

(1)コーパス整備

本研究では、文末助詞に関わる文法化や意味変化の詳細を実証的に考察するため、大量の言語データを必要とする。そこで、母語話者による作例や日常自然会話から散発的に得られたデータだけでなく、広東語による小説・シナリオなど出版物の書面資料からも幅広くデータを収集する。得られたデータは用例を効率よく検索するため、電子化しコーパスとして構築しておく。このほか、文末助詞の分析には音調の微妙な違いを考慮する必要があるため、映画やテレビ/ラジオドラマのセリフといった音声資料を母語話者の補助を得て書き起こし、コーパスとして蓄える。

(2)文献調査

広東語の文末助詞に関する従来の意味記述や理論的分析のほか、一般言語学における文法化や意味変化のメカニズム・方向性に関する通言語的知見を収集し、理解を深めておく。特に、文末助詞と関連が深いモダリティ表現、語用論標識の文法化・意味変化に関する知見を中心に参照する。

(3)考察と成果公開

「２.研究の目的」で述べた課題について考察を行い、一定の成果が得られた段階でその都度、国内外の関連研究会・学会で発表し、フィードバックを得る。

４．研究成果

(1)本研究の当初の課題の考察結果

名詞化標識“嘅(ge3[kɛɨ])”由来の文末助詞には ge3、ge2、gE2 が挙げられるが、これらをめぐる文法化及び意味変化について、以下の成果を得た。

①文法化

・文末助詞 ge3([kɛɨ])は、名詞化標識“嘅”(ge3)が命題全体に付加されることで文末助詞としての機能を果たすようになったものだと考えられるが、単独で使われるだけでなく、しばしば他の文末助詞を従えて文末助詞連鎖を形成する。その際に数多くの文末助詞と組み合わさることが可能であったり、平叙文だけでなく疑問文にも出現可能であったりといった分布の広さやそれに起因する意味の希薄さを考慮すると、名詞化標識“嘅”由来の文末助詞 ge3 は、現代広東語では文法

化の度合いが相当高くなっていると結論づけられる。このことは北京官話における名詞化標識由来の文末助詞“的”の振る舞いと比べると顕著である。

・文末助詞 ge2([kɛ˧])は、従来の研究では、前述の文末助詞 ge3 と疑問を表す文末上昇イントネーション“↗”が組み合わさってできたと考えられてきた。本研究ではそれに対し疑問を呈し、新たな説を提出した。すなわち、[述語句＋“嘅”] という名詞化構造(例:“甜嘅”「甘いの」)を述語部分に取る判断文に文末上昇イントネーション“↗”が合わさった構文[述語句＋“嘅”+↗]全体が再分析(reanalysis)を受けて、[述語句]＋[“嘅”(kɛ˧)+↗]と解釈され直した結果、文末助詞 ge2([kɛ˧])が生じたと見なす文法化経路である。つまり、従来の研究と異なり、文末上昇イントネーションと結びついたのは名詞化構造を作る構造助詞“嘅”(ge3)[kɛ˧]の方で、文末助詞の ge3 ではないと見なした。また、文末上昇イントネーションの表す意味についても先行研究とは見解を異にする。本研究の描く ge2 の文法化経路が示唆するのは、イントネーションのような超分節音的成分が文法化に参画し得るということであり、これは通言語的文法化の知見に照らしてみても珍しい事例である。

②意味変化

・前述の文末助詞 ge2 の意味は従来、＜原因の質問＞であるとされることが多かったが、本研究では実際の用例を精査した結果、＜反予期＞と定義するのが適切であるとの説を提示した。そして、その定義を踏まえ、本研究では ge2 にはほかに＜反発＞の意味を表す用法もあることを指摘し、前者から後者が生じるまでの漸進的な意味変化プロセスをコーパスからの豊富な用例に基づき明らかにした。その上で、前者から後者への意味変化を、対事的意味から対人的意味への変化という、通言語的によく見られる意味変化であると位置付けた。

・文末助詞 gE2([kɛ↗↘)は、由来的には前述の文末助詞 ge3 と文末上昇下降イントネーション“↗↘”の組み合わせからなるものであると見なされるが、本研究では gE2 は ge3 とは既に分布特徴が異なり、両者は区別されるべき別の文末助詞であることをまず初めに主張した。その上で、gE2 の意味については、＜異論提出＞と＜留保付け＞という 2 つの意味を持つと規定し、併せて前者から後者への意味変化が対人的用法からテクスト/談話接続的用法へという、通言語的によく見られるもう 1 つの意味変化方向と合致することを見い出した。

このように、本研究では名詞化標識由来の文末助詞をめぐる文法化・意味変化については想定よりも多くの知見が得られた。これらの知見は、広東語のネイティブ研究者や欧米の研究者が集う国外の学会で口頭発表を行ったり、国外の学術誌へ論文を投稿したりして、広く成果を公開した。(「５．主な発表論文等」参照)

他方、もう 1 つのテーマである間投詞から文末助詞への文法化については、相対的に研究遂行が遅れており、言語データを収集し、考察を始めた段階でとどまっている。具体的に文末助詞へと文法化を遂げたと思しき間投詞(感動詞)としては、le1/le2、laa4(日本語で「ほら/ねぇ、いいかい」に相当)が挙げられ、それらに由来する文末助詞としては le1 や le5、aa1laa4 が考えられるが、これらの文末助詞の詳細な意味分析も含め、文法化経路、及びその後の意味変化については今後さらに考察を継続していく必要がある。

(2)本研究の課題と関連するその他の成果

本研究では、意味変化に関する考察が想定よりも深まった結果、名詞化標識や間投詞に由来しない別の文末助詞についても意味変化の探究が進んだ。その成果の 1 つが文末助詞 aa1maa3 の意味変化の考察である。

aa1maa3 については、従来の研究では専ら＜自明性＞の意味のみが指摘されてきたが、本研究では以下の 3 つの意味を区別した。すなわち、＜自明命題伝達＞、＜正解確認＞、＜確約取り付け＞である。その上で、＜自明命題伝達＞からいかにして後の 2 つの意味が生じて来たか、その漸進的な意味変化のプロセスを多くの用例に基づき明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　**5**　件）

①Iida, Maki. Sentence-final particles in Cantonese and Japanese from a cross-linguistic perspective. *Media and Communication Studies (Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University)* 71, *65-93,* 2018. 〈査読あり〉

②飯田真紀「広東語の文末助詞連鎖の形態論的分析」，『ことばとそのひろがり(6) ―島津幸子教授追悼論集―』(「立命館法学」別冊),31-58, 2018. 〈査読なし〉

③飯田真紀 《粤語句末助詞 gE2 的語義和語義變化》,《中國語文通訊》(Current Research in Chinese Linguistics) 第 97 卷第 1 期 (第二十屆國際粤方言研討會特刊), 19-31, 2018. 〈査読あり〉

④飯田真紀 《粤语句末助词"嘅"的语义和语法化途径》,《中国语文》,第 4 期(总第 379 期),421-437, 2017. 〈査読あり〉

⑤飯田真紀 《粤语句末助词"嘅 ge2"的两种功能和交互主观化现象》, 孙景涛·姚玉敏主编《第十八届国际粤方言研讨会论文集》,广州：暨南大学出版社,113-127, 2015. 〈査読あり〉

〔学会発表〕(計　7　件)
①Iida, Maki.　A morphological analysis of the combinations of the sentence-final particles in contemporary Cantonese. The 22nd International Conference of Yue Dialects.　The Education University of Hong Kong, Hong Kong. December 9th, 2017. 〈審査あり〉
②飯田真紀《跨语言视角下粤语句末助词的定位问题 ～　与日语句末助词的比较》, 第 18 期 中山大学语言学沙龙, 中国・中山大学中国语言文学系, 2017 年 3 月 28 日〈招待講演〉
③飯田真紀 《粤语句末助词“ge2”的两种用法和交互主观化现象》, 第 17 期 中山大学语言学沙龙,中国・中山大学中国语言文学系, 2017 年 3 月 27 日 〈招待講演〉
④飯田真紀「広東語の文末助詞 aa1maa3 の意味変化」日本言語学会第 153 回大会, 福岡大学, 2016 年 12 月 3 日
⑤飯田真紀《粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化》, 第二十屆國際粵方言研討會, 香港中文大學,　2015 年 12 月 12 日〈審査あり〉
⑥飯田真紀 《粵語裏“V 到 NP”的構式意義以及“到”字的功能擴張特徵》, 香港中文大學 中國文化研究所 吳多泰中國語文研究中心語言學講座, 香港中文大學, 2015 年 9 月 22 日 〈招待講演〉
⑦飯田真紀《粵語裏“V 到 NP”的構式意義以及「到」字的功能擴張特徵》, 香港科技大学人文学部 Seminar,香港科技大学人文学部, 2015 年 9 月 21 日 〈招待講演〉

６．研究組織
(1)研究代表者
飯田　真紀　(Iida Maki)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：50401427